◀**網代笠**　月性が諸国遊説のとき使用した物

「清狂」の大きな字は篠崎小竹の書による

▲**鉄杖**　藤原忠光これを作るの銘あり
諸国遊説のときに使用した物

幕末勤皇僧「月性（げっしょう）」

月性は、今から約200年前の文化14年(1817年)、周防、妙円寺に生まれた。清狂と号し、詩人として、海防僧として、幕末激動の時代に、多くの人の心に影響を与えた人物である。

豊前、恒遠醒窓の下で詩文を学び、長崎では、書物でしか知らなかった外国という存在を目の当たりにする。

故郷を旅立つからには学問を成就するまで帰らないという「志」を詠った男児立志の詩は、漢文の教科書にも掲載され、これまで多くの若人が口ずさんだ。

嘉永元年、妙円寺庫裏の一部に、清狂草堂という私塾を開く。あくびをして背伸びをすれば頭を打つほどの小禅房から始まった草堂には、各地から志士が集い、幕末明治の混迷する時代を愚直に駆け抜いた人物を輩出した。

遺書となった吉田松陰の留魂録には、「清狂の護国論及び吟稿、口羽の詩稿、天下同志の士に寄示したし。」とあり、月性思想の求心力と、詩文の完成度をうかがい知ることができる。

安政5年、突然の病により、42歳でその生涯を閉じる。奇しくも、盟友、梅田雲浜、頼三樹三郎、吉田松陰ほか多くの勤皇諸士が弾圧を受ける大獄直前のことであった。

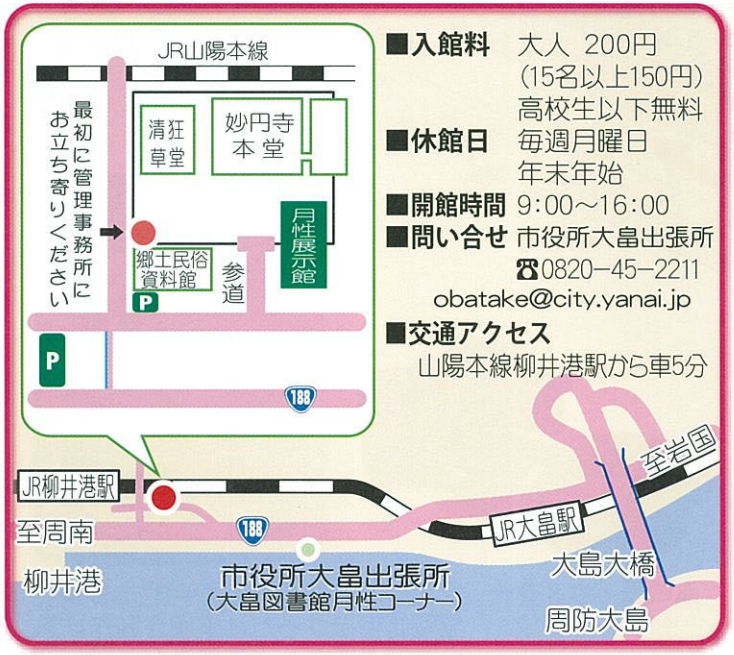
将東遊題壁二首

二十七年雲水身
又尋師友向三津
児烏反哺応無日
忍別北堂垂白親
男児立志出郷関
学若無成不復還
埋骨何期墳墓地
人間到処有青山

二十七歳となり、未だ修行の身である私は、こうして師や友を訪ねて大阪に向かう。今日まで勉学の為とはいえ、白髪交じりとなった母に仕えることもなく他郷にばかりある自分を思うと不孝の罪を感じずにいられない。しかしながら、この非常の秋、壮士止め難く、男子が一旦志を立てて郷里を出るからには、もし学業が成就しないなら再び帰らない決意である。骨を埋めるのにどうして故郷の墓地に執着しようか。世の中には、どこへ行っても骨を埋める青々とした墓地があるではないか。そこに埋めてもらえば充分である。

月性展示館案内

〒749-0103　山口県柳井市遠崎（妙円寺境内）



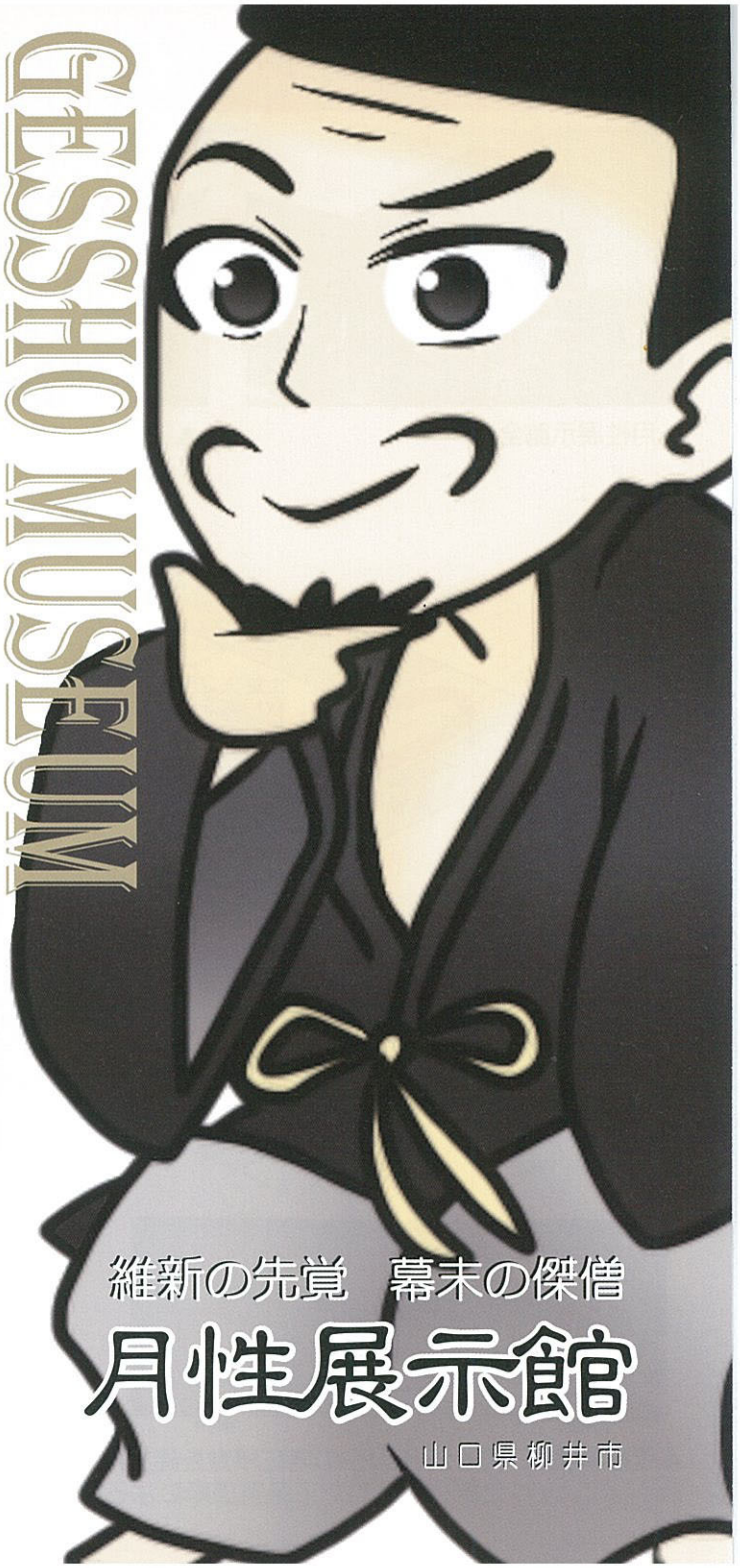
■**入館料**　大人 200円
（15名以上150円）
高校生以下無料

■**休館日**　毎週月曜日
年末年始

■**開館時間**　9:00～16:00

■**問い合せ**　市役所大畠出張所
☎0820-45-2211
obatake@city.yanai.jp

■**交通アクセス**
山陽本線柳井港駅から車5分



維新の先覚　幕末の傑僧

月性展示館

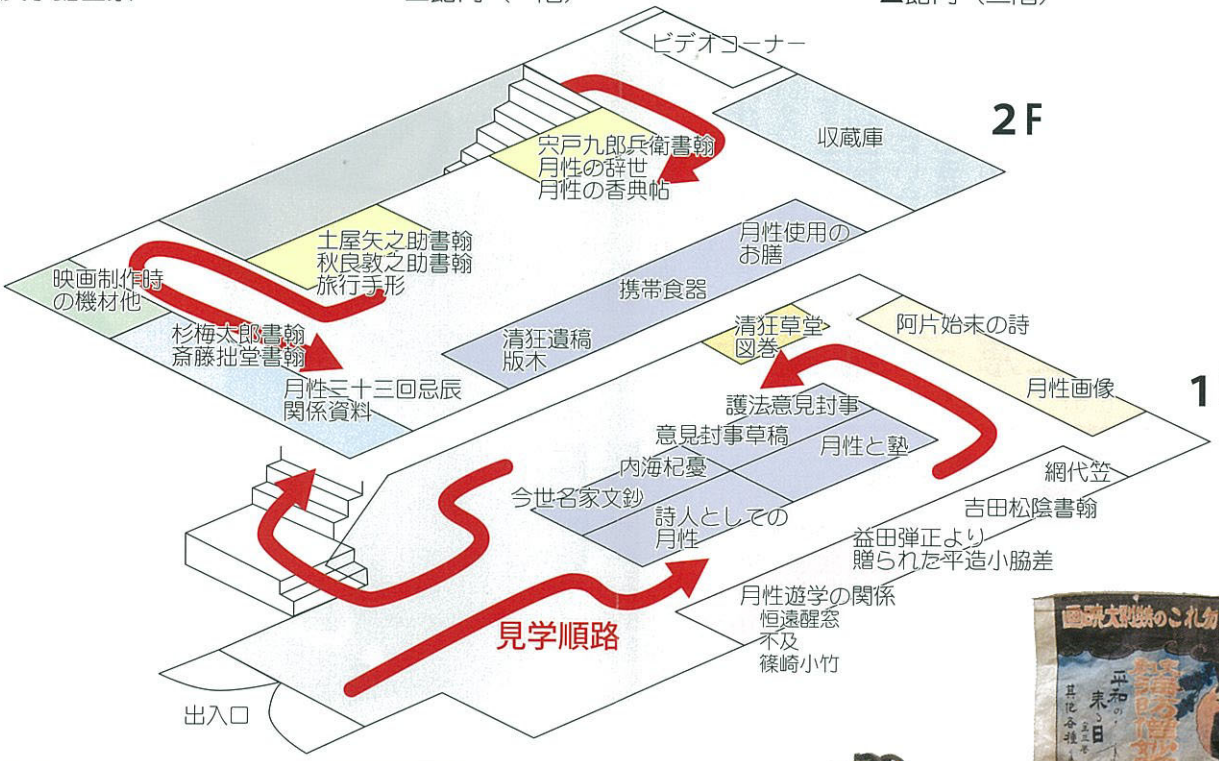
山口県柳井市

月性展示館内部所蔵・展示品

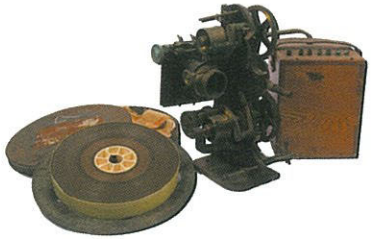
▲月性展示館全景

▲館内（一階）

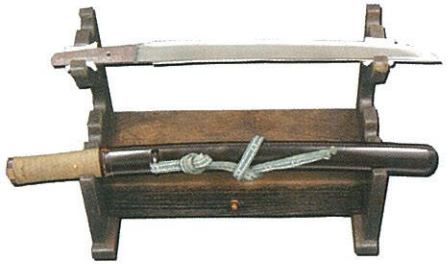
▲館内（二階）



▲清狂草堂額　明治23年現在の清狂草堂を建立するに際し贈られた三条実美筆による額



▲映画・ポスター　大正12年高杉房槌氏が月性の偉業を全国に宣伝するため映画を制作する。その時の機材と上映ポスター



▲平造小脇差

安政２年藤原清重作の銘あり。藩家老 益田親施(弾正)から賜る

◀月性画像

安政２年8月に福岡藩 林 道一が訪れた際に贈られた画並賛。明治20年僧黙霖が墓参した際、賛が書き足されている

妙円寺境内

◀清狂草堂

嘉永元年に月性が開いた私塾(別名：時習館)を模して、明治23年に偉業を顕彰する遺品展示館として建立

男児立志の詩碑 ▶

立志の詩は天保14年の京阪遊学に際して作詩された。
文字は松陰神社所蔵の清狂吟稿による。
昭和44年建立